

「青年海外協力隊OG」

森重

MORISHIGE Yuko

裕子さん

ネパールで知った  
開発途上国の現実

寒さが一段と増し、肌荒れが気になるこの季節。乾燥対策として、シアバターのクリームを使っている人も多いのではないだろうか。日本でも数年前から女性に人気のシアバターは、西アフリカを中心に生育する「シア」の木の実に取れる植物性油脂。バターのように肌に溶け込み、保湿効果も高い。

これに目を付け、ブルキナファソのシアバターを使った商品を販売する会社を立ち上げた青年海外協力隊OGがいる。森重裕子さんだ。

国際協力に関心を持ったのは、大学の卒業旅行で訪れたネパールがきっかけ。道端で眠る子どもや物

# 「シアバターで日本とブルキナファソの人々を元気にしたい」

シアバターを通じて、ブルキナファソの女性たちの生計向上に貢献したい。  
青年海外協力隊OGの森重裕子さんは、隊員時代に培ったネットワークを生かし、日本とブルキナファソの懸け橋となるビジネスを立ち上げた。

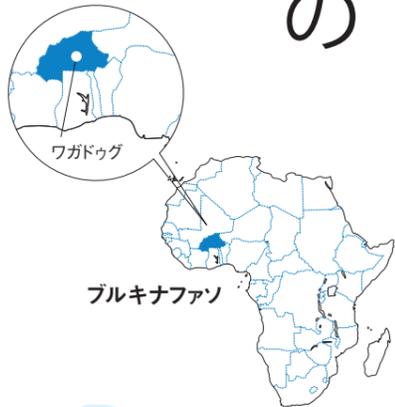
## JICA Volunteer Story

PROFILE

1969年大阪府出身。大学卒業後、百貨店に就職し、7年間勤務。退職後、大学院に在籍しながらネパールでNGO活動に従事。2003年7月から2年間、青年海外協力隊(村落開発普及員)としてブルキナファソで活動。09年、株式会社ア・ダンセ(www.a-danse.jp/)を設立。



起業後、シアバターの買い付けに訪れたブルキナファソの村の女性たちと森重さん(左端)



ごいをする人々を目にして衝撃を受けた。卒業後は百貨店に7年間勤務したが、ネパールで見たその光景を忘れられず、退職して大学院へ進学。子どもの人権などを学びながら、NGOのインターンとして再びネパールに降り立った。

そこで痛感したのは、子どもを虐待や人身売買から守るためには、彼らの親への支援も必要だということ。「母親たちは収入を得る手段がなく、社会的立場も弱い。まずは、その状況から変えていくことが必要だと思ったのです」。

途上国の村に暮らす人々がどう考え、生活しているか知りたい。そう思い、大学院を休学し、青年海外協力隊に参加。「現場でじっくり活動に専念できるのが魅力的でした」と森重さんは振り返る。

### ブルキナファソの女性たちを支えたい

2003年から2年間、協力隊員としてブルキナファソ南西部に赴任した森重さん。特に力を入れた活動の一つが、地域の人々の衛生意識の向上だった。「街のレストランや屋台では、とても衛生的とは言えないキッチンで料理が作られていました」。

そこで森重さんは食品を扱う店舗を回り、「安全な食材を使っているか」「調理者はきちんと手洗いをしているか」「調理器具は清潔か」などの項目を調べて衛生面の改善に向けたアドバイスを行った。さらに、小学生を対象に保健衛生について参加型の授業を行ったり、ブルキナファソや周辺国のニジェール、ガーナで活動する隊員と協力し、保健衛生分野を担当する省庁の職員などを対象に研修を実施した。

これらの活動を通じて、ブルキナファソの現状を



a.日本の石けんメーカーの技術者から品質管理を学ぶ女性たち。日本で「売れる」商品を目指す  
b.病にかからないようにするにはどうしたらいいか、子どもたちの意見を聞きながら授業を行った隊員時代の森重さん  
c.シアバターの原料となるシアの実。ブルキナファソの女性たちが一つ一つ収穫する  
d.隊員時代、森重さんが衛生指導をしていた道端の屋台

肌で感じ、帰国後は大学院に戻った森重さん。HIV/エイズ予防の研究を進める中で、あらためて途上国の女性に着目する。「収入を得るために売春という手段を選ばざるを得ない女性、男性より社会的地位が低いために家族計画を立てられない女性も多くいます。HIV/エイズを予防するためにも、やはり必要なのは女性の能力強化、地位向上だと感じました」。

そんな時、転機が訪れる。「私自身、肌のトラブルに悩んでいたところ、シアバターを使ったらすぐに治ったんです。ブルキナファソでは万能薬。多くの人々がシアバターの石けんを作っていたことを思い出しました」。日本で販売すれば、ブルキナファソの女性たちの現金収入源にもなり、日本の女性の肌トラブルの解決にもつながるのでは。そこで09年に立ち上げたのが、株式会社ア・ダンセだ。

森重さんはブルキナファソの市民団体と協力し、現地の女性たちが石けんを生産できる体制を整えた。「協力隊で培った人脈はもちろん、ブルキナファソの文化やビジネスマナーについての知識、コミュニケーション能力をフルに活用しました」と森重さん。日本の石けんメーカーの技術者が指導に行くなど、品質管理にもこだわっている。森重さん自身も現地に足しげく通い、シアバターの買い付けや品質管理にかかわっている。

「わずかな現金収入が、現地の女性たちにとっては希望の光となります。仕事を果たすことで、自分の意見を言うようになるなど確実に変化が生まれ、とてもやりがいを感じます」と森重さんはうれしそうに語る。日本とブルキナファソをつなぐ手作りの石けん。これからも両国の女性たちの元気の源となっていくに違いない。